

第3分科会

「コミュニケーションと集団作り」

共同研究者	群馬大学 教育学部 教授	金澤 貴之
助言者	神奈川県聴覚障害者連盟	
	副理事長	熊谷 徹
司会者	なかまの里	三田 智士
	たましろの郷	宮崎 純一

はじめに

第3分科会のレポートは5本。参加者は共同研究者、助言者、司会、レポーター通訳者、要員を合わせて37名になりました。参加者は学生、現場職員、相談員、看護師、事務職員など幅広く、それぞれの立場から色々な質問や感想、意見などが出されました。

レポートの概要

① 「なかま…LifeHistory 聞き取りプロジェクト」

たましろの郷

プロジェクトチーム代表 栗原富美子

なかま（利用者）の生まれてから現在までの様子について、家族と本人に聞き取り調査をおこない、なかまが生きてきた背景を知った上で、今後の支援に繋がりたいという思いで立ち上げたプロジェクトです。

プロジェクトチームは支援員だけではなく、看護師、管理栄養士、事務職員も入りました。

聞き取りが始まるまでには色々な課題もありましたが、家族も協力してくれて、3年間でほとんどのなかまの聞き取りを終えることが出来ました。

聞き取り方法は生まれたときの様子や学生時代の様子など、資料にまとめて全員に同じ質問をし

ていきました。

今後は一番大切な主人公であるなかま本人に将来どうしたいのか等、自分の想いを語ってもらい、その想いに沿った支援に繋がりたいというレポートでした。

② 「Aさんの問題行動をどう捉えるのか？いきがいは？」

北摂聴覚障害者センター ほくほく

職業指導員 西野 桃子

とてもまじめで責任感の強い女性のAさんですが、職員や仲間に対して言動がきついで仲間から距離を置かれつつあります。Aさんがイライラした時には職員が理由を聞こうとしますが、受け入れてもらえず、理由が分からないままになってしまいます。

夫との結婚生活は我慢ばかりしていましたが、現在の楽しみは友達男性Cさんと時々ゲームセンターやパチンコへ行くこと。

Aさんには人を思いやることが出来る優しい面もあるので、そういったAさんの良いところを伸ばす取り組みをしていきたいとのことでした。

参加者からはイライラした時にはその場から離れてもらい、少し落ち着いてから理由を聞く。目を見てゆっくり話し、正しい伝え方をする。今ま

でのAさんが過ごしてきた環境から比べると、現在の作業が退屈なのではなどの意見も出されました。

③ 「認知症のある人に“傾聴”“共感”するコミュニケーション方法」
特別養護老人ホーム あすくの里
松下 麻由美

認知症のある方に対して「バリデーション」という手法を取り入れて、利用者の想いに寄り添い支援し、利用者の感情を傾聴・共感することで、職員との関係以外にも良い影響があったという実践報告でした。

「バリデーション」という手法を知らない参加者が多く、ミラーリング（相手の動きや感情に合わせる）は怒っている時でも同じように相手に合わせるのか？タッチングの方法は？認知症以外にもバリデーションは使用されているのか？等の質問が多くありました。特にミラーリングについて、相手が怒っていても、同じように相手の動きや感情に合わせるということで、試した結果、利用者が拳を振り上げて怒っていた時に介助者が同じように怒った表情で拳を振り上げると、利用者が振り上げていた拳を下ろして落ち着いたという事例には参加者から驚きの声が上がっていました。

今後も利用者を手話で話しながらバリデーションの手法を取り入れていきたいということです。

④ 「本人主体でコミュニケーションを広げよう」
いこいの村 栗の木寮
石川富美・谷本美帆・森田眞実

知的障害のある鈴木さんは絵を描くのが得意で日中活動中の創作活動で、自画像やコーヒーの絵を描いています。鈴木さんにとって、絵はコミュニケーションツールにもなっているようです。

手話表現が少し苦手な鈴木さんに対して職員は日頃の行動を観察し「鈴木さんがこういう表現を

した時にはこうしているのではないか？」「あの時の様子はあの事を訴えていると思う。」というように、職員間で情報を共有し、鈴木さんの共通の言葉作りに取り組んでるという事でした。鈴木さんだけでなく、他の仲間に対してもそういった取り組みを行い、本当の想いや願に少しでも近づけたらという報告でした。

⑤ 「Aさんの想い」

社会福祉法人 大阪聴覚障害者福祉会
障害者支援施設 なかまの里 岡田 拓郎

入所Aさんは1ヶ月に1回のペースで帰省出来ていましたが、母親のケガで帰省出来る見通しが立たずにイライラしたり興奮してテレビなどの器物破損を繰り返しています。興奮している時には声掛けしても受け入れられずにいますが、少し時間を置き、落ち着いた後に話をすると、反省の表情で何度も頭を下げています。Aさんが見通しを持ち、落ち着いて生活できるようにカレンダーなど使用して説明しているが、帰省の中止や延期などの場合に、Aさんへどう説明すれば伝わるのかが今後の課題になってくるとのことでした。

支援者側から伝える手段・ツールも必要だが、Aさんがイライラした時に自分の気持ちを器物破損という行為ではなく、他の方法で伝えることが出来るように支援していく事も必要ではという意見もありました。

グループ討議

1日目に2本、2日目に3本のレポート報告をしてもらった中で、共通するテーマ（柱）3つを金澤先生から出してもらい、そのテーマに沿った内容で参加者を4グループに分けてグループ討議をしました。テーマ（柱）は①伝わりにくいことを通じさせる方法。②なかまを知る方法。③なかま同士のトラブルを解決する方法の3つになりました。

グループごとに司会、記録、発表者を決めても

らい、1 時間程度討議をしてから 1 グループ 5 分以内で発表してもらいました。各グループで討議が盛り上がり、時間内にまとまらないグループもありましたが、発表の時にはしっかりまとめました。

伝わりにくいなかまに対して通じ合わせる方法については写真や絵を使ったり、日頃のなかまの様子を観察し、情報共有しながらなかまの言いたい事を掘みつつ、なかまに伝わりやすい方法を工夫する。なかまを知る方法については、なかまが生まれてきてから今まで生活してきた背景を知り、日々なかまを観察する。なかま同士のトラブル解決方法については原因を特定してお互いしっかり話をするなどの報告がありました。

共同研究者の感想・考察

どれも密度の濃く、意義深い報告でした。改めて感じたのは、支援者の皆さん、なかまの一人一人のことを、「よく見ている」ということです。聞こえない上に知的障害などの障害を併せ持っている方々とのコミュニケーションを図るには、ちょっとしたしぐさ、応答を、見逃さないということが大切になると思います。

それぞれの報告の中にも、また、グループ討議の中でも、支援者の皆さんが日々行なっている、「通じ合わせる方法」や「知る方法」、「トラブル解決法」を実践する際に、しっかりとなかまの動きや、時間を重ねる中での変化をしっかりと注意深く見ていて、なかまの視点に寄り添うように解決策を見出そうとされている様子が伝わってきました。「寄り添う」というのは、「よく見る」ことを通じてなし得る実践なのだと、改めて勉強になりました。

助言者の感想・考察

5本のレポート報告と出席された皆さんの質疑応答&意見を聞いて、感じた事ことは、なかまを思う気持ち、なかまと意思疎通しようとする気持

ちが強いことでした。意思疎通は、コミュニケーションとなり、それは支援者あるいは、なかま同士がお互いに存在を確認し合える手段、それがなかまの生きがいに繋がる大事なものなんだと改めて思いました。

司会者の感想・考察

1 目目のレポートでは、なかま自身を理解する為に、ライフヒストリーの聞き取りを、支援部だけでなく、施設全体で取り組んだことには大変意義があると思います。今後は、なかまが主人公になれるよう、なかま自身に自分の想いを語ってもらえる場を作ってみてはどうでしょうか。きっと生き活きとした今までとは違うなかまの様子が見られると思います。また、その次の取り組みとして、その様子を DVD に収めたり、本にしたり、自分史作りに繋げてみても面白いのではないのでしょうか。

2 目目のレポートは、まず A さんの想いをしっかりと受け止める為に、A さん自身を理解することから始めることが大切ではないのでしょうか。聴協の役員までやっておられた方なら、どういう仕事を望んでおられるのか？どういう役割が自分にふさわしいと思っているのか？またどんな楽しみを持って生活してこられたのか等、「これはこうやってください。」「これはこうやってはダメです。」とこちらからお願いするばかりでなく、A さんの想いや願いをしっかりとお聞きすることが大切だと思います。

3 目目のレポートでは、手話を用いたバリテーションの実践は、健聴者への傾聴・共感の大切さ以外に伝わる喜びをどのように共有出来たのか？またそれがどのように集団づくりに繋がっていったか等、今後実践を積み重ねたうえで、改めて報告が聞きたいと思いました。

4 目目のレポートでは、鈴木さんの描いた絵を通して共感関係が生まれ、他者から認められているという自己肯定感が高まり精神的な安定につな

がるということ。また、口の周りにひいた口紅から、やりたい気持ちがたくさん出てくるような暮らしを保障することが大切であるということ。共通の体験を増やし、共感できることを増やして、本当の思いや願いに寄り添った支援に繋げていきたいという報告には私自身とても感銘を受けました。

5つ目のレポートでは、お母さんだけをクローズアップするのではなく、Aさんと職員、またAさんと他のなかまとの関係づくりはどう進めていくのか？Aさんと共感を得る為のコミュニケーション手段の工夫やツールの活用等はどうしていくのか？等基本的な視点での支援の見直しが必要であると同時に、器物破損以外の伝える方法について、もっと考察や検討が必要だと思いました。

いずれのレポートも、この分科会のテーマである「コミュニケーションと集団作り」において、『ライフヒストリー』や『共通体験』、『共感』といった言葉がキーワードになっていました。

日々の支援や関わりのなかで、なかまの願いや想いを引き出すことが出来ているか？また、なかま自身から伝えたいと思えるような環境になっているか？また、伝えることが出来るような環境になっているか？また、その願いや想いを受け止められる集団になっているか？また、その願いや想いを職員間で共有し、実践に結びつけることが出来ているか？

コミュニケーションが保障された集団の重要性を再認識しながら、改めて支援の根幹となる考え方について見直すことが出来ました。

今後もその中から、なかまのやりたい気持ちを集団の中で育みあい、実践を積み重ねて行きたいと思います。